目 黒 0 兼吉親 分が 来 て (J なさるそうだ。 ち ょ () 挨 を

て来る から、 れ で勘定を払 って 置 () てく れ

0 離^は 銭 屋^れ 形 行 平次は、 って しま 子分の 61 ました。 八五郎 に 紙 入 れを預け て そ 0 う

目黒 の 、栗飯屋、 時分時で、

ŋ ます 不 動様詣り の 客が相当立て 混 ん でお

それ も承知 か。 廉^{*} いや、こりゃ」

姐さん、

勘定だ

よ。

何

?

百二十

文。

酒

が

本

付

11

て

11

る

若にがし ガ か ラ ッ 八 付 けを置 は自分の懐見たいな顔をし () て、 さて妻楊枝を取上 て、 げました。 鷹き 揚う に 勘 定 をすると、

る い茶が 一杯。

景色を見るん だって、 資も本と を か け Ź と何 となく 心持 が 違 11

ょ 伺 いますが、 あ 0 銭 形 0 親 分さんは?」

りま 優 した。 二 t た た ち 耳 前後の大店 に近々と囁 0 くように 若女房と 訊 か 11 れ つ た女が、 て、 ガラ ッ 少 八 顏 は を 振 り返

め 尋常 に 腰 を 屈が め る で た。

親分は向う 行 って るが、 何 ん だい 用 事 こてえ 0 は ?

あ O, 銭 形 0 親 分さ ん 0 ところ の、 八 Ŧi. 郎さんと言うの いはあない

たで

よく 知 つ て e s る な、 八 Ŧi. 郎は俺だ」

確 か K 八 <u>F</u>i. 郎 親分さん で 平

次は離屋か

ら帰

つ

て来ました。

かなこ () る とは 郎 Ŧ. 親 郎 なら、 あるまい 分てえほどの貫禄じゃ 俺 に 違 11 ねえ。 ねえが、 本 人が言う 銭形 ん だ の 親 か らこ 分 の ところに れ ほ

んか」 「それ ガラ ッ やこれ は古風な洒落を言 を、 そ っと銭形 って、 の 親分さん 長^なん が 4 ^ 顎 お 手 を 渡 撫 し下さいませ で まし

もの取次ぐと、 ぁ 八五 ッ 郎 に 待ちねえ。 握らせた 俺は殴 親分と来た日には江戸 の は、 り倒されるぜ」 半紙半枚 にほどの 一番 小さく畳んだ の堅造だ。 結び文。

ら当節 人混 冗談 追 み 9 か じゃ 0 女は嫌 中 け ねえ、 る八五郎 **^** 大きな蝶々の e st さ 岡つ の手をス 引 へ付け文する奴もねえもんだ。 のように身を隠し ルリと抜けて、 女は 7 ま 店 4 まし か ら往 これだか 来 0

そ の ガ 結び文を捨てる場所もありません ラ ッ 八 は で つ か e s 舌鼓を つ、 四^ぁたり を 見廻 しましたが、 さて、

「ままよ、どうとも勝手になれ」

お静 完 な 位 余計 素 良心 全 知 幸 らぬ に つ 11 がチクチ は 平 平 少 次 渡 顔をすることに決めてしまいました。これなら結び文は 次 から預 し済まな しを で の手には入りますが、 クし た。 した つ た 羅 紗 罪だけは免れます。 たところで、 いような気がしないではありませんが、 0 紙入れ そんな事に屈託する八五 自分は知らぬ存ぜぬで通せば、 それ \boldsymbol{b} つ へポ とも、 ン と投 平次 ŋ 0 込ん 女房 郎でも 少々

「どりゃ帰ろうか」

エ紙入れ。 勘定は百二十文、 あんまり安い から受取も中 へ 入

れて置きましたよ」

「栗飯 の受取なんざ、 禁じない にも なるめえ」

文をされるだけあ 庭石をト ンと踏んで、 つ て平次はまだまだ若くて好 傾きかけた西陽を浴びると、 い男であ 成程女に付 ります。

一何をニヤニヤしているんだ。 帰ろうぜ」

ヘエ 姐御がさぞ気が揉めるだろうな」

「何だと」

「なに、こっちのことで」

二人は肩を並 べて、 神田 ^ 向 いました。

郎。 た。 無 頃ガ 人で困る ラ ッ か 八 は、 らと言う 向 う 叔 母 原 0 0 願 叔 母 11 を叶えてやる 0 家 に 泊 り 込 ん つ \boldsymbol{b} で お り ŋ 0 Ŧi.

物 の下心だ や、 何 時 折 ま った 々 で の b 着物 0 独 です。 り も一と通 じ Þ あ るま り揃えさせてや 11 か ら、 嫁を りた 持 た せ (J とい る 支度 う 0) に が 叔 夜 母

て、 と突き当 と絶えたところ フラリと柳原 日 ったも ガ ラ ッ 八 ^ 0 来ると、 が 土手を帰 0 八 あ りま 五 郎 す。 いき つ が て来た 平 な 次 ŋ 0 闍 0 ところで、 は戌刻過ぎ、 0 中 から飛出 遅 11 人通 晚 て、 飯 を ŋ 済 ۴ 0 ま 力 ハ せ

「気を付けろ、間抜け奴」

人前 0 啖^たんか を浴びせて 黙 つ て 飛 んで行く 男 の後ろ姿を見て

11 ると、 後からもう一人。

あ

と立直るところを、 足をさらわれて、 さすがの 八五 郎、 真ま つ 逆が

様に引くり返ってしま いました。

何 しあがるんでえ、 怨らみ があるな ら名乗 って 来 11 金 な k ざ、

百も持っち ゃ いねえぞ」

か 腕 ガ ラ と言 つ つ た 節 ッ ったが 0 の です。 強 も力ず e s 追付きません。 0 くでは滅多に人 揃 って来られては、 相手は恐ろしく強 に 引けを取りませ 全くどうすることも出来な $\epsilon \sqrt{}$ ん のば が か り三人。 んなに

 \equiv 人の 相 手は、 亜ぱ 0 如 黙 りこく つ て、 ガラ ッ 八 0 懐 か 5 袂

髷 ば が し 0 中 ・から、褌の の三つまで捜 しました。

すぐ つ てえや、 野郎、 何が 望みで 人の 身体を捜す す ん だ。 臍~ な

ん か摘 むと噛みつ (J てやるぞ、 畜生 ッ

え の です 5 П だけ れ て は 達者に動きますが、 作業では、 ガラ ッ 八 非凡 0 一武力も 0 腕 力 全 ζ 揃 甪 () に いよう 両 がな 手 か を 押

身で、 ح れが 素姓も 駆 素 け て 衆だと、 来 知 れ て 貰う な e s 者に、 術でも 大き あ e st 声 往来で手籠にされ つ を出 た で ょ て自身番を呼 う が る 0 手 を見 捕 ž ح 縄 5 を か れたく 往 来

な e s あ

りませ

ん

人が来た」

謎の鍵穴 引揚げよう」

ます。

した。 すと、 るうちに 小さ ガ そ e st 声で ラ の 人残らず町 まま後をも見ずに三方 ッ八が三人 囁き交した三人、 0 のうちどれを追 闍 に解 ガラ け込んで ^ 0 ッ 八 つ ح しま 駆 れ を土手 は け つ ょ 実 た う に の 心 نج 上 0 得 か で す 暫 5 た ゃ 突き転 \Box が す で

だ 根 か つ つ つ た た こに Þ そ 0 0 れ で 獅 で す。 す 噛が どころでは か み ら、 付 かなか 三人の あ りませ ったら、 曲者を追 ん。 危うく土左衛 土手 つ か け から るどころ Ш ^ 門 転 に が 0 な 沙 さ る 汰 れ で 7 は 柳 ろ な 0

立 上 が つ て懐を探ると幸 () + 手 は 無 事

畜 生 ッ

歩き 袋 吅 髷 き 出 0 刷は毛は で に した。 さ て 先をを れ お りま て 直 P し 致 て、 た。 し方が 肩 懐 か 中 な ら 0 11 裾 + ع 0 手さえ無事 炭を払っ 11 つ た達観 うと、 なら、 た気持 ガラ 多勢に ッ に な は 無勢、 もう つ 7

翌 小母さん る 月 ガラ 八 さ ッ ん 八 在 の ら ところ つ や ^ る? 大変な者が押 あらそう、 し 掛けて来ました。 まだ寝て るな

ん 頼たの 母も 11 わ ね え

を含く ます に 東 十五. が ね 6 だよう 7 六 そ 白 れ な、 粉 に ح b 0 2 気 時 増 少 な 代 て、 低 0 相 11 0 素す 声が < 治せ で ね は く 大年増 ね 色 ح 0 0 品しな 女 白さも、 を作 0 で すが、 縹りょう る 唇 以 上 細 洗 0 に 紅 11 0 髪を 身 さも を悩ませ 無造作 艶ま めき

お前さん は?

叔 母は 少 し遠 *(y* 眼を見張 りま した。

あら、 忘れなすっ たの。 心 細 e s わ ねえ、 八さん の

Þ ありませんか、 ホ、 ホ、 ホ」

すま 呆れた。 私 にはそん な素振 り b 見 せ な 11 ん だ ţ あ

は

腹が立 犬とも知れな うと思う、 て 叔 るあ 母 は ってたまらな 少し涙含い んない不潔そうな女が、自分の計画を裏切った 子 0 八五 ん 郎は、 か でさえお 画を裏切ったばか ったのです。 角 の乾物屋の二番目娘でも貰 ります。 メノ 二階 りでなく、 メと押掛けて来たの で大 e s こんなどこ びきを掻 って 11 の山 やろ 7

とここに 小母さん、二階へ行って宜いでしょう。 いる心算りよ、 可愛がって下さるわねえ」 どうせこれ から 先、 ズ ッ

登 ってしま いました。

呆れ果て

た叔

母の口

へ埃を落して、

お吉と名乗る

女は二階

本当に寝て いるよ、 人は」

ょ な な と言う方が がら、 りは、 がらゆすぶ お吉は八五 八 片手はもうその夜具の襟 <u>Fi.</u> 適当だ 郎 郎 つ 昂の枕元へ、浮世絵のに寝ているよ、この-の夜具へ手を置 て ったでしょう。 お りました。 いて、 11 や、 に掛 の遊女のように、 って、 自 八五郎をゆす 分の身体を揺 精 一杯 تتم ~ 0 媚態を つ つ て た IJ 見せた 坐 ŋ ŋ

事 て法 ちょ に す は る な \boldsymbol{b} **7**。 のよ、 起きて下さ 鼻から提灯なん もう辰刻過ぎじゃな e st か出 私 が 来 してさ、 て 上 *(y* げ 狸な 0 た 0 らも ちょ に う 寝 ع 少 て 八 11 さん 綺 麗 9

てば」

何と言う悩ましさ、 窓から入る秋 の朝陽が、 暫らくカ ッと赤く

なったほどの情景です。

「うるさいな、もう少し寝かしてく

くるりと寝返りを打った八五郎。

あら」

枕の下に入れた財布がはみ出 したのを見ると、 女はそっと引出

て中を調べました。

玉ね、 「まア、ちょいと、大の男がこんな財布を持って歩くの。 鐚銭まで入れて六十四文、 ホ、 ホ、 ホ、 水、 だから八さん 良 e s 胆 つ

は可愛 のさ」

ら順々に抽斗を開けて見ました。 女はそんな事を言いながら、 長火鉢の側ににじり寄って、 それから、 手箱、 押入れと、 上か 覗 7



©2017 萩 柚月

0 11 . る 袖 て 廻る 0 か でした。 ら眼 のを、 ば か り出 ح の時はもうす て、 世にも怪奇 つ か り眼 な bの覚めた八五 0 を見るよ 郎 う に は、 覗 夜具

「八さん、世帯道具はこれっきりかえ」

女は 又元 のところへ来てペタリと坐りました。 例 0 悩

姿』。

「 お 前 は 誰 だ 4 何だ つ て人の 家 へ入 って来るん だ

起き上 が って、 寝巻 0 胸をカキ合せると、 長 i s 顔を 引締 め 7

し屹となります。

よく気を落着けて 「あら、 忘れちゃ 御覧よ、 () やだよ、 私 の顔を見忘れる筈はな 夫婦約束までしたお吉じゃ i s な な e st か

「な、何だと?」

なんて怖 い顔をする λ だろう。 だけどさ、 不 -断お 前 さん は 優

から、 そう ・屹とな つ たところも、 飛んだ立派 よ。 頼 母 61 2 た

らないんだよ、ウフ」

め か 女は身を翻すと、 い香気を発散させて、 掛け香を三十もブラ下げ 八五 郎 0 膝 ^ 存 分に身を投げ たような 妖き か 艷

のでした。

わ ッ 何をしやがるんだ。 俺 は 女 が 嫌 11 だよ。 ح ح に お 前 0 ょ

うな 0 は、 見 た だけ で 虫むしず が 走 る

何を言うの さ、 この 間は一緒 に な ってく れ って、 お 前 さん 0 方

から泣いて口説いたじゃないか」

冗 P 休 み 休 み言 え ッ。 そ れ とも お 茶 番 0 稽 古 なら、 又日 を改

め てお 願 11 しようじゃな () か。 馬鹿馬鹿 しい

か しこの勝負は完全に八五郎 の負けでした。 どうしても 緒

難 ラ 神 付 0 な だ ッ な 田 Ш とです ると言う女を突き飛ばして、 つ が た の八 5 袷 へ飛込んで洗 を 0 五郎、 です。 銭形平 が、 引 掛 八五郎 けたまま飛 自 次 慢 0 おう 家 は ではないが、 骨 <u>^</u> 出 の髄まで女臭くな し |と言 __ た 目 ろく 散に 0 った、 は ح 駆けて れが に顔 そ 途方も るも洗わ 臍~ れ 行 つ か 0 緒 た 5 つ ず、 よう た な 四 切 半 つ 11 昨 て 衝 な 刻 で 気 動 夜 以来の女 ば た。 に が か の して、 泥 り後 ガ ら

四

親 分、 ん な わ け で、 馬 鹿 馬 鹿 しく て人様 に 話 が 出 来 な 11

深 4 わ け が あ りそうだから、 このまま隠 して置 けません」

ガ ラ ツ八 は 昨 夜か らの 一伍一什を打明け て、 親 分の平次 0 知 恵

を借りました。

「そいつは面白そうだ、手前幾つだ」

次 は 大真面 目 に こん な 事を言 います。

「三十になったばかりで」

勘平 さんと同 4 年 か、 それ で女が 出 来な e st つ て 法はあ るまい。

そ の お吉とか言う の *p'* どこか でからか ったん じゃな 41 か

思い出して見るが宜い」

飛 ん でも ねえ、 親 分。 ح 0 八 Ŧi. 郎 が、 女に か ら か つ 7 忘 れ る か

忘れねえか」

は 話 ま あるま が 面 そ 白くなりそうだ。 う e s が、 厶 丰 に な 人様から預る つ て 怒る 何か な。 大事な か何か お前 b に 0 覚え て持っちゃ どうせ金 が なき Þ () 目 ア な *()*

しま から 大した品 ガ した。 ラ 平次親分さん は、 じゃありませんが、 目黒 の へ渡すようにと結び文を頼まれたことを話 栗飯屋で、 たった一つ心当りが 大^{ぉぉぉぉ} の嫁 ع 11 つ た 若 あ ります」 11 美し

掛女房も、 ねえ遠慮 それそれ、 をして、 その結び文が それ 俺 に 決 に渡さな つ 欲しか たよ八 か つ ったん たんだ」 昨 夜 だ、 0 柳 原 の 何だっ 暗 P て 又 今 \mathbf{H} 押

親 分 の紙入 れ の 中 ヘソ ッと入 れ て置きまし た

何、 俺の紙入れに入れた。人の悪 いことをしやがる

少 々 平次は懐 であるだけ から紙 入れを出して見ましたが、 結び文などは影も 形も 中 あ り には鼻紙と ませ ん。 が

おや、 親 分のところへも 押掛け女房がや って来たん じゃ あ り ま

せんか」

ガ ラッ は 少 ば か ŋ ツ溜飲を下ぶ · げま た。

「そんな馬鹿なことがある b 0 か お静、 お静、 紙入れの中 つ

ていた、結び文を知らないか」

平次は次の間へ声を掛けると

「これでしょうか」

お 静 は 何 の蟠りもなく、 小さ e s 結び文を封も切らずに 手 箱 0 中

から出して持って来ました。

マそ れそれ、 気がきく 0 も好し悪 しだ。 紙入 れ 0 物を始 末する 時

は、一応俺に訊いてからにしろ」

ハイー

気が お静は た 少し 0) で 赧 よう。 くな りました。 それでも、 淡 結び文の封を解かなかっ い嫉妬をたしなめられたようない、、、、 た のは、

何 e st う仕合 ら、 そ しせだ ん な つ た 事を考え 0 で しょ て う。 () る 内気 0 で な た お 静は襷ったすき び

どれ بخ れ 八、 お 前も か か り合 (J だ 立ち会 つ て < れ

す 筋 る 砂 平 次は 粒 そ 馴 つ の れ た て 上 でそ b(J て 0 Ŕ, で、 つ ع 結 見 半 紙を二枚 0 び 文を がさな 解 ほ 11 11 ど持 ようにする て 行 きま つ て 来 ため た。 て、 だ 髪 台 つ 0 0 毛 た 0 並 ع

「おや?」

ŋ ゙゙ますが 思 つ て e s た通 中 に り、 は 何 畳 に 6 b だ 0 は て 半 は 紙 () ません。 半 枚、 0 切 П 判はっ わ か

す さ *()* 13 二 重 大き が 11 つ、 一重◎ が __ んなな つ、 変哲 肉 太 P 0 な 11 0 P 字 が 0 を 描 9 11 て P あ う る 9 小

これは何だい、一体

返 て 見 ま た が、 そ れ っきり 何 にも あ り ´ませ ん

手 思 7 は 7 議 紙 眺 描 上 で で 0 0 め 11 す。 字 す た て が 重 に 直 丸 0 上 は ぐ 字 続 0 少 は 棒 几 11 し大きく 帳面な て が二分位 つ 0 そ の直 て径 に 字 下 下 は、 角 怪二分 で、 寸 点 0 棒 左 ほ こが三分 Ŧ. ど、 つ 0 方 見 厘 ほ だ そ つ 位、 ڮٚ から け 0 下 な 何 つ 番 寸 べ て 4 ん 下 13 最 る 0 分 り 返 重 離 P 丸

何でしょう親分」

判 り、 余程 廃た 0 品 り者らしく に は違 だ け 11 بخ な あ るま 11 年増 れ 11 が が、 欲 こう 押 さ 掛 に、 しようじ け 嫁に来るところを見 立 派 な Þ 御 な 用 *(y* 聞 手て お吉

は

八

五.

郎

0

脱

ぎ捨

て

た

袷

0

袂

か

5,

贋

物

0)

結

び

文

を

捜

出

ん

た。

き、 を描 つ、 そ 0 0 平 で 0 す 最後 次は は二寸 きました。 枚を 念入り お の二重丸 ば 半 静を紙屋 か 分 に真似たくせに 上 に ŋ 截き は 離 の二重丸は グ に る ٤ て、 走らせ ッと大きく、 八 二の字 て、 少し小さく、 Ŧi. 郎 わざと少しず 同 0 が じ程度 托な 足はそ 径三分五 され れ 直 た の Ĺ ぞ 厘 径 結 質 ほ れ つ び 寸法 どに 分 文 Ŧi. の 半 位 ع 厘 紙を買わ 書き上 を変えた 同 ほ ど 長 絵を三 丸 一げた <u>ک</u> = せ、

言う女がま 余 7 帰 る 仕 ح に 違 事 れ だ を か 11 b な 持 () る 知 11 つ 0 て れ 6 な 帰 な そこを跟け 5 れ 11 ぜ、 袷もせ き 気を付 つ 0 決ちと て、 と探 ^ 入 け 巣を突き止 し 出 てや れ て る て 行 贋 が < 物 宜 め ん る だ ん 知 だ。 ら そ ず 0 に ح な 持 れ 吉 は つ ع

お 吉 と言 郎 う は 女は 平次 に言 す わ つ か れ た通 ŋ 女房気取 り運びました。 ŋ で、 叔 母を手 帰 つ て 来 伝 た 9 0 7 は 晚 飯 夕 景

支度などをしております。

お 八さん、 お 帰 6 な さ e st 0 大 層 な 御 機 嫌 ね

「何を言やがる」

た袷 を 脱 郎 ぎ は 捨て ツ イ ると、 痛っ 烈れっ に 浴 少し薄寒そう び せ か け ま な 浴 た 衣を が 引 思 か 11 返 け 7 て 手 拭 て を

片手にプイと飛出しました。

銭 湯 行 く 0 か 11 本 9 け て 待 つ て ま すよ

路 地 追 を 9 駆 る け るように 天 水 桶 お 吉 0 蔭 0 声 ^ 蝙ゔ 0 ガラ 蝠り のよう ッ 八 、は舌鼓を に ピ タ IJ 一つ、 と身を隠 大急ぎで、

て、 続 11 て そ 0 後 か 5 飛 出 た事 は言うまで b あ ŋ ませ

ろを振 八五郎はブラサ 銭形 向 ブラサゲた手拭を早速頬被りに 11 て の親分の見透しさ。お吉の阿魔、ぁ も見 ねえ。 \boldsymbol{b} っとも、 振 り しました。 向 か れちゃ すっか 大変 ガラ り喜んで後 ッ 八相

う。 女はそ へ辿り着いた時はもう亥刻 λ な事も 知 ら ぬ様 子で、 賑 や (十時) か なところを通るように、 近い頃でしたでしょ

応

五

お や?

六軒茶屋町から永峰 町、 行人坂を越して、ぎょうにんざか ガラッ八は女の姿を

見失ってしま つ た 0) で す。

傷をそそります。 夜と違って良 太鼓 橋 を渡 4 つ て、 お月様 中 目黒 K 照らされて、 の 方 ^ ` 田^たんぼ そ 道 辺 を当も 0 風物までが な く 行 妙に感 昨

どこやらで 女の悲鳴。

け出したガラッ八は、ハタと躓きました。

往来に崩折れ ているのは紛れ もないお吉、抱き起すと、 あッ

乢 胸 を とえ ぐ ŋ, とたま りもなく 死んだ様子です。

下 ど、 手 早 凡そ女が物を隠しそうなところを残るくまなく捜しましたが くも結 奪 5 び文に気の付いたガラッ八は、 れたと見えて、 そ の 辺には影も 帯の間、 形も見えません 袖、 襟 な

0 筋とは関係 それ か らの騒ぎはどんなに大袈裟であったにしても、 0 な () ことです。 とに か く自身番まで死骸を運ばせ この 物語

て、 町方役人立会で検屍を済ませた の は夜中過ぎ、 困 つ たことに、

女の身元 がどうしても 解 りません。

「銭形の親 分ところの 八兄哥じゃな e s か 飛 6 だ事 に 掛 り あ つ て

さぞ迷惑だ ったろう」

平次に楯を突 りません。 遅 て 飛 ん 4 で来た目 た り、 黒 八五郎をからか 0 兼吉 ح れ つ た は 老 りするよう 巧 な 良 11 な 御 人 用 柄 聞 では

の身元を洗 目 黒 の親 分、 って見 ح て下さい れ に は 深 11 わ け が あ り そ う で す ぜ。

と

か

女

あ

E. 郎 \boldsymbol{b} 外に 工夫はあ りませ 6

吉 の子 分は 方 に 飛びま した。

落れ に 女はや 両替もやると言 は りお吉と言うの った、 近江 が本 名で、 屋七兵衛 中 自 0 黒 番 頭佐 切 つ 太 て 郎 0 物持ち、 が 人目を 洒しゃ

憚って 思 11 切 り遠 方 に 囲 つ て () る妾だ つ た 0 で す。

で、 引 近 つ 吅 江 筋 屋 か 0 通 な 0 番 つ 11 頭 ば た 佐 か 太郎 りに責め は は、 つも自 翌る て見ましたが 状 H しません。 の昼前 に 縛 知 5 5 れました。 ぬ 存 ぜ ぬ 0 番 一 点 所 張 で

度そ 0) 頃

親 分、 大変、 近江 屋 の主 人 が 死 に ま し た ぜ

兼 吉 の 子分が 番 所 ^ 飛 込 ん で来た で す。

何 ? 頓死か、 怪 我か」

とい ことによれ 「それが怪 う 身体 ばやられたのか しいんで が 斑 に なって 昼飯 b 知 `` の後 れません」 舌も で、 眼 大変な苦しみようだ 引 釣 つ た って言うから、 った

そ e s つは大変だ。 八兄哥行 つ て見るか

()

先代七兵衛

は

十

年ば

か

り 前

に

ح

の

土地

^

来

て、

件を育

て

て嫁

間 泉 な 寺 が 吉と八 0 ら場所 前 Ŧī. 一郎は、 柄 ح だ 0 辺 け は 宙を飛びました。 0 商売 昔 0 はあ 方 び繁昌 つ た わ したとこ 岩屋の けで す 弁天前 ろ で を通 近 江 屋 つ b 片手 竜

11 0 0 店 釜吉 森ん 外は が ح 附 て ゴ () て ッ 主人七兵衛 タ いるだ 返す騒ぎ、 け 0 そ 死 れ 体 を かきわ は、 若 け 11 女房 て る 0 お峯と 奥 は 思

「おや」

が る 死体 う は二た 死んだ つ 驚 11 主人と たこ 眼 とは見ら ع いう は、 れ 七兵 の な は 衛 *()* 虐さ 精 と言う年 たらしさです 々二十五六、 寄 り 臭 11 名 寸 好 を 持 つ 居

「あッ、お前さんは」

です。 次 お峯 八五 ع 郎 いうの と言 は もう って、 は、 一つ度胆を抜 ツイ二日前に、 謎 の結 び文を渡 か れまし 同じ目黒 した、 た。 死体 あ の 栗飯 0 美 0 側 屋 で に 11 女だ e st る 親 女房 分 つ の 平

きい それを言 お しみと困惑とに悩まされ 0 訴 出 Ź す気にもなりません る 眼 付き 邪に 念など た眼付き は 微 塵 bあ を見ると、 りそう 0 な Ŧi. 11 郎

は、 親 分 様 方、 御苦労様で 御 座 います」

ません す Ŧī. 十男ら 下 男とも、 さ す が 11 実体さで挨拶しました。 小 使とも、 の死体を前に 庭掃きとも、 して、 沈み切って愛想 笑うと恵比須様になる男で 人で兼ねてい つ る 気も 釜吉は、

. 15 な

ŋ

を貰 i s ま ŋ ま たが、 せ ん。 本 当 0 他国 者 嫁 里 は、 身寄りも友

六

て、 がべ あ す る 0 この二三年来のお吉は、 と言 が 佐 それ つ ちこ 追々 ッ つ 郎 に お 0 つ 吉 た IJ 死 に は つ で骸を繞ば 附 判 ちに借金を作 噂 が 近頃お吉 4 殺され 商売 つ いていたので、 て来たことです。 佐太郎 上手な って、 た の貪欲な追及を持て余して、 時 重荷だ には暗 ってい 事 分 四 丁度店 一十男で、 件は恐ろしく複雑 疑 ったに 11 るこ () 影でした。 を言 に となども、 11 人など害め 相違ありません。 *()* な 解 か く術もなかっ つ 全く佐太郎にとって、 た に のと、 そうも な 調べが進むに従 切れたが りま 着 な し このため、 た た。 物 11 の つ て です。 間 番 IÍII. 頭 潮 で

5 で りませ ħ 判 主 つ で た つ 7 ٨ 0 た 食べたの ع た 判 七兵衛は、 七兵衛は茶が好きだったのと、 で りま のではあるま は、 た。 こした。 本^{ほんどう} そ の生菓子の そ () の毒は、 (内科医) かと 外には 昼頃食べた生菓子の餡 訔 が立会って検屍 います な 朝から昼まで か が、 つ たというところま 確 の末、 か なことは の 食物で、 毒を 0 中 盛 に

ば 経 お を ŋ お茶 粒 ませ す か 口 0) 相手を ら 入れ です 七 兵 ただ か 衛 した 5 0 け 死 0) 疑 で、 λ は女房 だ 11 生菓子は食 は 0 当然 は、 0 お · 峯 嫁 佐 太 で 0 すが、 郎 べ お な 峯 が 番 か そ 人 所 つ た に れ 掛 引 は ع 金ん 自 つ か 分 米心 て れ 来 糖さ で て な 言 か 刻 何 つ 7 れ か

吉がお 筝も縛ると言 い出したのは、 決して 無理なことではな

かったのでした。

ぉ 願 いですから、 銭 形 の 親分さん をお 呼 びし て 下さ *(y*

自 分 の身辺が危うくなると、 お峯はそっと八五 郎 にささやきま

した。

「それ じゃ 訊 < が、 あ の 結び文は 何だえ、 それを言っ て 貰 わ な

きゃア、御新造を庇いようはない」

八 五. 郎 0 言葉は少 し厳しく聞こえたので し ょ う。

私には 何 にも判りません、 主人が亡くなる二三日前ゃど か ら、

どうも危な れ を 預 ってく , れ、 このままでいるとどんな事になるか解 と私 へ渡したのです。 訊き返しても、 らな 何も言 () ・から、

いませんでした」

お峯 の言葉は意外 でした。 が、 綺麗な小さい 顔、 わ ななく唇、

生 懸 命 な 瞳を見 7 41 ると、 どんな不自然なことでも、 ガラ ッ八

は信 じてや りた いような気になります。

「それから」

私は 「あ 一人で決めて飛んで行きました。主人はもうろくな口もきか 0 H 銭 形 0 親 分さん が 不 動様 に参詣に いらし つ たと e s て、

な いほど心 配し ていましたし、 私はあの結び文を持 って いるのが

怖くてならなかったのです」

主ゃ 人ど は が 八五郎さんにお願 見なけれ ば判る道理がないから、 そうか、 仕方があるま いして、 銭 形 の親分にお頼 11 ` あ と申しておりました」 符牒が だ みしたと話すと、 け では、 見る人

お峯の話はそれだけです。

で 間 P れ 兼吉 つ て が しま Þ 11 つ ま て 来て、 した。 縄 は 打ちません が、 お峯を番所ま

ろ ع 7 た 子 が が、 e s ろ手を 判 分 町 2 た ま が 内 尽 帰 0 0 た。 医 で したの つ 者や、 す。 て く 毒を手に ると、 は 目黒 お峯ではなく から白 兼 吉 れ ょ 0 うと した 金がね 事 て、 して、 麻 はす 布 却 医者 つ 円 つ て佐 か 0 生 P り 太郎 引 薬 生 薬 屋 屋 だ を り 返され 調 つ たこ べ さ 11

七

何日か無駄に過ぎました。

佐 郎 は どん なに責 め て お吉殺しを白 状 せず、 お 峯 0 方も

夫殺 嫌 疑 が 段 々 薄 < な るば か りです。

ませ そ で自 が 断 血 れ でな 分 は お 郎 の着物で匕首を拭かなければ、こんな型が ります。 た て っとも、 着 の 11 仔 で、 物 刃物を拭 細 着 成程そう言えば 『銭形平次親分に注意されて来た』 のあることで お吉殺しの時の不在証明は持 11 っ た 血 て e st た血 の跡だと判りました。 しょう。 ح 血潮は刃形に いうのは、 人 附 を つ 付く 刺 () て これ て いませんが 道 ح た 4 理はあ て、 は は 時 つ 0 き Ŧi. 返 自 郎 分 ŋ

悪 預 夫 婦 け お 峯 0 あ 仲 e st 懸か る が らざる注意を喚び起す筈もあ なら、 雇 つ た夫殺 人達が羨むほ 江 戸 しの疑 番 ど良く、 () の Ŕ 捕 物 同じように 0 名 そ れに、 ŋ 人 ませ に、 段々 ん 夫 謎 で 0 薄 P よう 殺そうと言 れ な結 て 行きます。

う つ、 生菓子 ^ 入 れ た毒も、 そ 0 時お峯が 入 れ たと は

限

5

決 な 4 つ た わ 菓子 け で、 だ つ 刻 た も 二 の で す。 刻も前 に 入 れ て 置 e st て Ŕ 七兵衛 が 喰う

を か け は許され る 程 0 が て あ 帰 る つ わ て来まし け で は た あ り が ません。 そ う か と言 つ て 他 に 疑 11

ょ う 自 分が 釜吉 知 馬 赤坂 鹿 は 9 実 て な 直 か ح *()* ځ 5 る 道理 買 点 は 張 つ する筈も て が り な 来たのですから、 0 男 か なく、 つ 菓子 た 0 で もその 第 し ーそ た。 自 H 0 分 0 菓子を誰が 朝 0 手で毒を仕込むよ 七兵 衛 に 食う 頼 0 7

せ 公 ん。 丁でっ 稚ぉ で の 長六、 お吉や七兵衛を殺すほど 下女 の お 咲 仲 働きの 0 理 お春、 由を持 つよう ど れ bな ___ 期 0 半 は 期 あ り 0 ま 奉

あ 銭形 るま 11 0 少 気 乗出 0 毒だが、 し て知恵を貸しちゃ 兄 哥 \boldsymbol{b} 満 更掛 貰えま り 合 11 11 が か な 11 わ け で

兼 吉 が わ ざ わ ざ神 田まで Þ つ て 来た の は、 そ れ か 5 七 日 b 経 9

た後でした。

つ 俺 が 当 出 り を言 Þ 張 つ て つ 置 ち く ゃ ` が 兄哥 兄 哥 に 済 0 手 ま な で 調 11 0 べ て ح 貰えま う ょ **5** 11 た 9 た

平 次は遠慮深 こんなことを言 11 ます。

ど ん な 事 だ 11 銭 形 0 兄哥、 こう な ŋ Þ ` ど ん な 事 で b Þ つ て

見るが」

だ つ 四 た + の 男 で 0 す。 兼 吉 は、 ح 0 稼 業 0 者 に 似 合 わ ぬ 謙ん 虚。 な、 人 柄 0 男

た だろう 近 11 ん 頃 だが あ 山 0 家 手 0 者 円 か ` 0 鍛か 治じ 屋ゃ 掛け 者 屋ゃ で を、 鍵 を持ら 内 Ž 証 さ で せ 調 た 者 7 は 貰 11

「そんな事ならわけはない」

が、 に な 兼 吉 何とな りそう は 大喜 な気 く自信 び が で 飛 した あ り気で、 出 0 ·です。 ま た。 これが 平 む 次 0 つ か 註 文は 11 い事件をほぐす端緒は見当も付きません

たこ ح ŋ の 0 が ع + に 日 そ \boldsymbol{b} ば れ そ か b b 0 り 全 な 中 0 間 に か 無 は に つ 駄 鍵を 近江 な努力 た 0 屋 頼 です。 ん の者は言うまでもなく、 でし だのは三十 た。 山 人もありますが、 手 の 鍛冶屋 近江屋出入 鋳 掛 屋に 困 つ

「どうだろう、銭形の」

一度目 に が つ か ŋ て 兼吉が 来た 時、 平 次は 日頃に、 b なく ·悄気

こんな事を言っております。

成程

これ

は

悪

か

つ

た。

あ

れ

ほ

ど

の

曲

一者が、

自

分

で鍵を註文に

行

、筈は

な

()

八

到頭平次は乗出しました。

目 黒 ^ 行 前 南 の奉行 所 ^ 寸顔 を出 て、 書き役 0 遠 藤

佐仲に逢い、

れ つ きり、 度 + 年 そ か の + 品 P 年前 現わ に れず、 ` 何 か 盗人も知れ 飛ん でも な な 11 11 物 と云うような事は が 盗 ま れ 7 そ

御座いませんか」

こんな事を訊ねます。

左様、 十年 か 十 年前と () うと古 () ことだが、 品 物 も盗 人も現

れ な の は 大 抵 書き残し て あ る筈だ、 待 つ てく

帳 面 を ラ パ ラ ع め く つ て 行 つ た遠藤 佐 仲 ば ら < つ て、

0 笑 みを浮 べ ま した。

ŋ ま た か 旦 那

あ つ た ょ 平 か も三つ だし (編 连

工

つ は 遠州浜い

そ な は 要 りませ 戸 0 近 在 の だ け で 山 で

板 橋 東景 庵ぁん 薬師し 如来に 像ぎ江 が 厨ず 盗 子し ま れ た を鏤ざ これは 慶 運作 0 御 丈け

が は め 込 ん で あ る、 が 年 前 0 春 盗 ま れ て、 未 だ に 行 方 が 知

な 4 갣

五.

寸

ع

()

う

大し

た

仏

像だ。

は

金

銀

め

仏

体

に

は

玉

そ れ か ら

金 座 0 後 藤 が 勘定 奉 行 ^ 送 つ て 極ご 印ん を 打 つ て 貰 う、 、 吹き 立

判 が六 両、 常盤橋 外 で 車 ごと 奪ら れ た、 そ 0 時 人足が二

役 が 人斬 られ た が ح れ もまた、 品 も下 手 人 b 現 わ

な 11

そ 0 判 K は 極 印 が 打 9 てあ る で ょ う

捺 7 な 11 筈 だ

通 出 来 ま せ ん ね

経 つ て 世間 で 忘 れ て 11 る か 5 極 印 位 は な 今

そ な 5 少 9 き 々 は ŋ 通用 する お 上 で か b P 知 知 5 れ な な 11 11 よ うち に、 P 9 通 ع P 用 極 印 て 0 11 贋せ る を か 作 P れ 知 ば

な

遠藤 佐 仲まことに 心 得 たことを言 11 ます。

「それだッ」

あ、 いた、 何がそれ だ

いえ、 こっちの事で、 どうも御手数を掛けました。 有難う

ます」

平次は その 足 で目 黒 ^

「目黒 の兄哥、大方見当 が 付いたぞ。 今度 0 曲 者 は ح 筋 縄 では

行 か な いわ けがある。 何十人でも宜い、 大急ぎで掻き集 め 5

だけ 人数を集め て貰 e sl た 11

兼吉を呼出して、 そっと囁きます。

宜 11 とも

顔 0 良 兼吉 は、 即 座に 子分や諜者を呼 びまし た。 刻 b 経 た

な いうちに、 近江屋 0 庭に集まった人数はざっと三十人。

ح

ŋ 有 0 家探 11 しをさせて、 れだけあ 日が暮 りや どんな狸でも逃しっこはねえ、 れたら 一人残らず帰る 振 りをする 型ば か

だ。 \boldsymbol{b} つ ともそっ と引返して、 塀の外か ら見張 つ てい て貰いた

ん だ

宜

二人は打合せると、

サア これ から家探しだ。 天井裏から、 床下まで、 目 の届 かな

隈は が つ ちゃならねえ。 押入れも、 戸棚も、 奉公人の 荷

皆んな探すんだ。 目当ては、お吉を殺した匕首と、 主人を殺した

毒 薬だ 他の物には目をかけるに及ばねえ」

次 が 号 令すると、

三十人ばかり 0 人数、 斉に 動き 出

よそ気 の長い家探しを始めました。

それが半日、 日が暮れて、 灯がなくては何にも見えなく なると、

平 次と兼吉は、 疲れ果てた人数を庭へ集め て、

店 て置 どう か 兼吉に言 一かな 5 b御 か 裏 !苦労、 わ ったんだろう。 れ か て、 ら、 これ 文句を言うわ 暗 だけ な 探 一人残らず帰 つ た下 て見当らなきゃ けにも行かず、 自黒 の 往来へ って休んでくれ ア、 出て行きました。 銘々 ح 、脹れ返 0 家に 隠 って

九

か、 付 け れ 目 て下さるだろう。 黒 で切上げだ。 0 兄哥 下手人は 最 後 0 思 到頭解らな 11 出 に、 _____ e s が、 人で見て 11 ずれ 廻 ると 閻ん 魔様が見

平 次 は お っくうそうに立上 が りまし

「無駄だろうよ、銭形の」

内 か 無駄 9 貰 の は は 解 いまし お前 つ て よう ば e st る か りだ、 か、 が 念 釜吉も一緒に来てくれ、 0 た 人徳 め だ、 がある んだね」 番 頭 さん、 疑 御 新造さ 11 0 か からな 案

御冗談を、親分」

釜吉 は佐太郎とお峯の後に従 いました。

仏 間 平 次は兼吉を先に立てて、 お 勝 手 雇人の部屋 店 から始ま غ 鍵の つ て、 あるも 納 0 戸 錠前 居 間 0 ある

ものを一つ一つ覗いて行きます。

時 は 自 分 の 袂から二三十束に た鍵を出 11 ろ 11 ろ 廻

たり開けたり。

せ ながら、 到 頭 手して 燭と提灯を点けさせて、 庭 0 方まで出 か けて行きまし 釜吉と八五 た。 郎 に前後 か 5 照 らさ

ます。 言う、 て、 長さ六尺、 ります 格子 赤 稲荷り 奥の i s 0 鳥 前 様 林 深さ三尺五 には、 居が十基ば 0 の中には、 の 嗣を移 元大きな拝 して、 寸もあろう 近所 か り、 元 の百姓地で荒 そ 殿 0 と言 0) の ま 前 ま 奥 う な に は あ 法 が ___ 外 間 5 れ つ 放題 た に 四 小 大 ع 方 綺 きな賽銭箱 ほ に 麗 () う、 な ど に 祀 0 つ 幅三 堂 て つ が 7 11 尺 あ あ た あ ع 9 ŋ

「これは大層欲張った賽銭箱だネ」

平次は笑いながら覗いて見ました。

卸し 銭 が てあ の厚板 枚あ りますが で Ź 組 だけ、 んだ、 覗 恐ろ 何 11 0 て 変哲 見るとよく く岩乗な もあ りませ 、底が bの 見え ん。 で、 大一 て 番 穴 の 0 海老錠 あ 11 た を 小

それ 大きい て、 な 重 平次は つ < た蓋 賽銭 でも手に従 て、 鍵を海老錠に持 を 箱 小首を傾けましたが 取 人 0 つ 内 て、 ح の力ではどうしても動きません つ 外 て廻 箱を横に 0 深さを測 って行くと、 つ て、 しようとしましたが 錠はわけもなく外れ そ り、 0 錆さ それ 辺 び付 に あ か ら、 () つ て少しきしみます た 自 細 分 11 ・ます。 棒 0 鍵 を れ が 束 持 恐 格子 0 つ 中 て が に

平 次は 箱 0 中 に 手を入 れると、 バ ラ銭をかき集 め ま た

「あッ」

そ 0) バ ラ 銭 0 枚 は 糊 で 付 け たも 0 で、 剥 すとそ 0 下 か 5 鍵

穴が一つ出て来たのです。

底板 Ш 吹 色 は手 次 予 に 従 期 小 ってボ 判で六千両 た ح 力 ح リと取 のよ 0 う 大金 れ に が、 そ そ 0 0 下 提 穴 灯と手 か に ら、 同 燭 目 鍵 を 0 0 覚 灯を受け 入 め れ る 7 ような 廻 7 す 燦ん ٤,

て 眼を射 た の です。

は 何

驚 兼吉 八五 郎 \boldsymbol{b} 佐 太郎も 峯も、 釜吉も、 暫 ら は 息を 吐

とさえ忘 れ た よう でした。

だ。 す な ら勘定奉行 な 金 を 年前 ら 覗 置かく 誰 で費う () すと で て見るとバラ銭が 稲妻は b へ送 気が わけ いう悪智 組み り届 付 と言 に は行か く ける六千 が、 恵 つ た三人 に 少し底 賽銭 は な 驚 両 か 箱ま 0 0 11 つ たよ。 の方に た、 小 泥 判を盗 棒 で が、 は ある。 賽銭箱 思 それ 常盤も つ 13 た b へ **電**っ 寄 は に が 橋は 銭 やい 5 で を 仏 ても な 極 金 入 壇 印 座 11 れ に が 0 賽 打 る 金 銭 道 つ 箱 て

次 は 人 で 感 心 てお りま す。

マそ の六千両を奪 った 泥棒 は誰 だ

たま り兼 ね て 兼吉 は \Box を 挾みま した。

恐ろ 鍵 取 七兵衛 つ 寸法 江 御 屋 は 賽 て 新 0 造 銭 か 先 代 な に 箱 渡 七兵 わ 0 な 鍵を預 衛 て 11 置 0 がそ で、 e s つ た。 たが、 の 首に そっ 領だ。 御新造が八 ٤, あと二人の仲間 七兵衛 鍵を捨てて、 五郎 が 死ぬ に渡 が脅っ 鍵の た かすので、 寸法だけ がそ 目

0

だ

つ

たし

次の二 そ 大き の た 0 めだ。 字は、 重 下 丸 0 鍵 は 二重丸 0 鍵 -0 番大事 上 は 輪 な二本 鍵 だ、 0 軸に ح の足だ。 0 れ 太さだ。 は あ つ 左 7 が揃 俺 b bな 9 て 7 れ i s が 0 は

鍵 は 親 分 寸

解

る

ま

で

は

日

か

か

つ

たよ」

ガ ラ ッ 八 は平 次 0 持 つ て 11 る 鍵を指 します。

近 所 の 鋳掛屋 に 寸 法 書 通 り 0 b 0 を 作 5 せた の

目 な 寸 法を 書 11 て お吉 に P つ た 0 は ?

書を か ŋ P 曲 う つ 11 た 取 ろ 者 人、 らせ 0 に いろの たが 杯 生き残っ 喰 事を わせ お 知 吉 た る つ 泥 は た て 昔 棒 め 11 さ が 0 た 七 殺 兵衛 0 曲 ع 者 て 浮 は 0 ま 仲 お 気 吉 間 つ ッ を た 0 ほ 泥 使 0 さ。 棒 つ て気が許 て 娘 お お 吉 だ 前 が つ か さ 5 あ た れ 寸 法 ま で

平 次 の 明 察 に 皆ん な固唾を呑む ば か り で す

らな 曲 者 11 上 毒 は は お 鴆などく 吉を そ 殺 ょ 0 ŋ 辺 た P 0 上 利く 藪に . (編 _ 沢 代 山 注 目 あ る 0 七 X 兵 X 衛 X ま \times で X だ。 殺 た。 あ れ は 生 味 子

「誰だい、その曲者は」

兼吉は我慢のならぬ声を出します。

変と 証 思 拠 か つ 5 た 先 0 だ に ろう、 見 せ て やろ 曲 者 **ئ** は 俺 先 刻 が 書 0 家ゃ 11 捜が た 偽 寸法 で、 見 で 拵 付 え か た つ 鍵 7 を自 は 大

分の身体に持っている筈だ」

野

郎

ッ

鍵

を

捨

てた

な

ッ

虫 13 0) 五 う 郎 に 格 は 怒 闘 ネ飛 鳴 が つ ば て ほ W て、 猛 0 犬の 暫 高 5 ょ 11 続 塀 う に < ^ 誰 飛 ع 付 見 か る (J ^ 飛 た Þ 付 0 曲せ きま で 者もの す は ガ た ラ 恐 ろ を

馬 鹿 ッ 外 に は三 + P 11 る 神 妙 に せ 11

が 手 か 5 投 げ た 銭 は 塀 0 0 曲 者 0 頬 を 打 曲 者 0

身体はそのまま下へ。

不 意を 喰 5 つ て ょ ろ め ところ ^ 塀 0 外 に 伏 せ た 人 数は

折重なって縛り上げました。

た。 死 0 λ ところ 曲 者は ツ ^ イ六千両を 潜 下 り込 男 0 釜吉。 λ で時 昔の稲妻組 人占 節を待 め に 9 うちに、 しようと の 仲 間 お で いう気にな 吉 あ 0 つ 父親も た。 先 つ た 七兵衛 代 七 0 兵衛 で P

0 11 佐太郎 です。 下 番 頭 が 0 つ 佐 はお吉が殺され て 太郎 釜吉と張合 は 何 に b た時 知らず。 つ て、 刻に、 近江 お 屋 吉 どこに は、 0 内 情 佐 (J 太郎 た を か 知 ろう 0 言 お ح 人 11 開 好 き 7 に 0 11 出 た 喰

世 な 来な 0 誤解を惧れて、 か 若 った 11 女の神 の は、 経を脅かす『恐怖』を お峯に庭の闇 それを言わなかっ に 誘 11 聴 出 たまでのことでした。 さ か さ れ て、 れ て 何 4 た ع 0 11 です う

(編注)

底本 三つだ」 中文庫版 では に 「銭形平次捕物控 し 改めました。 かも二つだ」 となっ ていますが、 の記述を参考として、 文脈 の整 合と、 しかも 嶋

版 底本 が 「銭形平次捕物控 の 底本のままとしました。 $\overline{\times}$ X \times X ×だ」と、 (三)」では 伏字にな 「トリカ って ブ トだ」 e st る部 とな 分は、 つ 嶋 て 中文庫 () ます

ます。 底本 が 作 なる古典的な文学作品でもあ 見ら 品 の 中 ままとしました。 に れ は、 ますが、 身体 本書が成立 の障害や人権に ご理解、 ŋ, した当時 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 の時代背景等が 差別的な語句や表現 現代とは異 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初 出 「才 ル 讀物」 昭和九年十一 月号 文藝春秋社

底 本 月三十一 錢 日 形 初 平 次捕 版 物全集」 第二巻 河出 書房 昭 和三十 年五

編集・発行 銭形倶楽部



銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/